國學院大學学術情報リポジトリ

グローバル化と文法概念：品詞論をめぐって：特集多様化する日本語研究の現在

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大野, 眞男, Ono, Makio メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000415

グローバル化と文法概念
―品詞論をめぐって―

大野眞男

一、文法概念のグローバル化

グローバル化とはどのような事態を指すのだろうか。一般に物や文化や考え方が国境を越えて影響を拡張していく現象は、何も前世紀末に始まったことではない。Coupland（二〇一三）によれば、グローバル化は決して目新しいものではないという考え方と、グローバル化は人類が初めて経験する新たな事態であるという考え方があるという。前者の立場に立てば、かつての植民地化や印刷技術の出現なども、人類の歴史の中で繰り返されてきたグローバル化の一つの姿だということになる。大航海時代、ヨーロッパの強大な社会・経済体制が地球全体に拡大されたこともグローバル化と見なすこともできよう。その一方で、一九八〇年代以降、資本の国際化、国境を超えた人口流動性の増大、インターネットなどの情報通信技術の予想もできなかった進展などによって、先行例とは比べ物にならないほどの桁違いの規模と勢いで、特定の社会経済的価値観や文化的価値観が地球上に拡大しはじめている事実もある。そもそもグローバル化とはマネー・キャピタリズムなどの社会経済的分野からはじまった用語であって、それがさらに文化現象一般にも拡大

適用されてきた。やはりグローバル化という概念は近年の動向に限定されるべきだという見方が優勢になっているのも当然かもしれない。

グローバル化に関してどちらが的を射た考え方であるかをにわかに判断することは筆者にはできないが、ここでは特定の外来の価値観が日本語の上に拡大すること、とくに文法を論じる仕組みにおいて西洋の影響を受けてきたことの一側面についてとりあげ検証してみたい。そうしておくことで、グローバル化がいっそう進展するであろう次の時代に備えたい。

グローバル化には、自らの価値観を拡張する側、外来の価値観によって拡張を受ける側の両側面が存在する。拡張を受ける側から見れば、グローバル化はある意味で文化的弱肉強食の状況とも言えるかもしれない。例えば、日本語内部においても、漢字・漢語を受け皿に欧米の外来概念を意訳的に受け入れた漢訳外来語に対して、近年の音訳による英語からのカタカナ外来語の氾濫は、英語圏を発信地としたグローバル化の状況に日本語が現在曝されていることを示しており、当然、それを危機ととらえる排外的純化論purismの観点もそこには生じている。

ことばの仕組みを論じるいわゆる文法概念について、近年になって、例えばヴォイス、テンス・アスペクト、モダリティーなどのような新たな文法用語が一般化してきた事態は、ある意味ではグローバル化とみなしてよいだろう。普遍的な尺度で人類諸言語の仕組みを論じることは、それぞれの言語の特性を相対化し比較・対照可能なものとする上でたいへん有意義であり、これらの文法概念は英語を含めた諸言語を相対化するのに有効に機能している。しかし、その一方で、普遍的とはいえないかもしれない文法概念で、すべての言語の仕組みを説明しようとしている側面が、現在の日本語を論じる文法概念にもしあるとすれば、そのような部分をあらかじめ洗い出しておく必要があるだろう。

たとえば「主語」という文法概念などは欧米語起源であって、明治の近代化の過程で言語類型の大きく異なる日本語に英文法から直訳的に導入された来歴を持つことは、三上章などにより明らかにされている。本来、日本語のハは主題を表すものであり、ガは主格を表すものであって、西洋語に固有の主語という用語で一括りにしてはならなかったことが明確に説明されている。三上は主語概念の英語からの移入について、

日本文法界が主語という用語を買被っていることに思い当った。なおよく考えてみると、こちらが買被ったばかり

でなく、先方も少し売被せたと思われる節がある。先方というのは英文法であるが、我々はまだ何といっても英文法の下風（ママ）に立っているのである。（三上・一九五三年）

と述べており、やはり特定言語（英語）の文法概念の日本語への拡張の一事例と見なすことができる。そしてそこに見られる、「売被せ」すなわち拡張する側と、「買被り」すなわち拡張される側との双方が存在していた状況は、現今のグローバル化と何も変わらない。本論では、さらに言語観を具体的に示す品詞論の問題を取り上げて、拡張する側、すなわち欧米人たちがどのように日本語を観察し理解しようとしてきたか、拡張される側、すなわち近代化の中の日本人がどのように国語に関する文法を構築しようとしてきたかについて、必ずしも平明ではない多様で混交的なグローバル化のプロセスと見なしてたどってみよう。

二、西洋人の日本語品詞観

現代文法で品詞といえば、名詞・動詞・形容詞・助動詞・助詞などといった品詞名があがってくるに違いない。しかし、日本人の素朴な言語観がこのような現代の品詞論と異なっていたことは、国語学史を学んだものには常識である。鎌倉末期、藤原定家作と伝えられる『手爾葉大概抄』の

和歌手爾波者唐土之置字也。以レ之定二軽重之心一、音声因レ之相続、人情縁レ之発揮也。…（中略）…詞如二寺社一手爾波如二荘厳一。以二荘厳之手爾葉一定二寺社之尊卑一。詞雖レ有二際限一新レ之自二在之一者手爾葉也。無尽レ心於レ是顕然矣。豈忽二緒之一哉。

の一節が雄弁に物語っていることは、和歌づくりにおける「てにをは」の使い方の重要性ばかりでなく、詞（自立語）と「てにをは」（付属語）とに言葉を大きく二分する日本人の素朴な言語観でもあった。膠着語である日本語の特質をよく反映したものということができよう。

江戸期の国学の時代に入ると、このような言語観にもとづきながら、国学者たちにより精細な日本語固有の品詞論へと展開されていく（以下、現代日本語文法で対応する品詞名を〈〉で示す）。冨士谷成章（ふじたになりあきら）は『挿頭抄（かざし）』（明和四年）『脚結抄（あゆい）』（安永二年）で文を人体になぞらえ、名（な）〈名詞〉、挿頭〈感動詞・接続詞・副詞など〉、装（よそい）〈動詞・形容詞〉、脚結（あゆい）〈助詞・助動詞・

接尾語など〉から成る四品詞論を展開する。鈴木朗(あきら)は『言語(げんぎょ)四種論』（享和三年）で、体の詞〈名詞〉、てにをは〈助詞・助動詞・活用語尾など〉、形状(ありかた)の詞〈形容詞〉、作用(しわざ)の詞〈動詞〉と四分類し、形状の詞と作用の詞を併せて用の詞（働く詞、活用の詞、活語とも）ととらえている。さらに富樫広蔭は『詞の玉橋』（文政九年）で、言葉を大きく言(こと)〈名詞〉、詞(ことば)〈動詞・形容詞〉、辞(てにをは)〈助詞・助動詞〉に三分類し、さらに詞を説動用詞(はたらきをいうことば)〈動詞〉と説容体詞(ありかたをいうことば)〈形容詞〉に、辞を動辞(うごきてにをは)〈助動詞〉と静辞(すわりでにをは)〈助詞〉に分けてとらえている。今日の学校文法などで、自立語か付属語か、活用するかしないか、という基準を交差させる品詞論の骨格は、『詞の玉橋』でほぼ完成されたものと考えることができる。このように国学の世界では、『手爾葉大概抄』に見られたような、そして、おそらくはそれ以前から日本人が日本語に関して抱いていた素朴な言語観にもとづき、品詞論が展開されてきたわけである。それでは、日本語をはじめて観察した西洋人たちはどのように日本語をとらえたのだろうか。

　古典的な類型論で日本語は膠着語に属するとされるのに対し、西洋諸言語は屈折語に属するとされる。日本語とは類型の異なる言語を持つ西洋人が日本語を観察するようになるのは、世界史的にいえば大航海時代、ローマ教会から派遣された宣教師たちが非ヨーロッパ世界に布教に入っていった時代である。数あるキリシタン文献の中で日本語の品詞を論じた資料は少なくないが、イエズス会士J．ロドリゲスが残した『日本小文典』（一六二〇年）の一節に彼らの日本語に対する姿勢が端的に現れている。

> 日本人は日本語の品詞を三つの言葉でまとめている。第一はNa（名）である。これは「名前」という意味の言葉で、この言葉のもとにまとめているのはすべての名詞・接続詞・感嘆詞・前置詞つまり後置詞、それから固有の文字（漢字）を持つすべての語―ただし動詞は除く―である。第二はCotoba（詞）である。これは*verbo*という意味で（ここでverboとは「言葉」という広い意味ではなく、厳密な意味である）、この名称でまとめているのは、あらゆる種類の動詞、すなわち結合動詞をはじめその他すべての動詞、それから形容詞的動詞である。第三はTe, Ni, Fa（てには）またはTe, Ni, Vo, Fa（てにをは）またはSutegana（捨仮名）またはVokiji（置字）で、この名称で一括しているのは、名詞の格を表わす冠詞―例えばVa（は）、Ni（に）、Vo（を）、

> Voba(をば)—、時制を示す小辞をはじめ、例えばMo(も)、Nimo（にも）、De（で）、Nite（にて）などのように、固有の文字（漢字）はないが本来の日本語であるあらゆる種類の小辞である。（池上岑夫訳『ロドリゲス日本語小文典』岩波書店、一九九三年より）

これらの詳細な観察は、明確に当時の日本人の言語観をとらえており、名と詞と「てにをは」から成る三分類は、まぎれもなく江戸期の国学者たちにつながる品詞論である。それにもかかわらず、この観察に続けて以下のように根拠のない断定が下されている。

> しかし日本語の品詞は、厳密に言えば十で、これらは問題なくラテン語の一般に行なわれている八品詞にまとめ得るが、われわれとしては理解を容易ならしむるために十品詞、すなわち詞（ノーメ）・代名詞・動詞・分詞・後置詞・副詞・感嘆詞〔・接続詞〕・冠詞・小辞にわける。（同上書）

キリシタン宣教師は当然ローマ中心の世界観を持っていること、日本小文典はアルバレスによる権威の高いラテン語文典を下敷きにつくられていることなどの事情により、日本人の言語観をあれほど理解していながらも、ロドリゲスはそれを排斥し、ヨーロッパ語の品詞論を類型の異なる日本語に適応している。言ってみれば、ヨーロッパ語文法を日本語に売り被せたということになる。この背景にあるものは、必ずしも客観的な言語探求の態度ではなく、カトリックの信仰に裏づけられたローマ中心の宗教的イデオロギーと言わなければならないだろう。ロドリゲスによるもう一つの『日本大文典』においても、ラテン語の規範よりは日本語の詳細な観察が前面に出されてはいるが、品詞論については『小文典』と全く同様の記述がなされている。

禁教令のためにキリシタン資料は日本人に直接の影響を与えることはなかったが、ヨーロッパでは江戸期を通じて日本語学習材として長く利用され続けていた。慶応三年、オランダのライデンにおいてオランダ語と英語で刊行されたJ．J．ホフマン『日本文典』（一八六七年）は、明治以前のヨーロッパにおける日本語研究の集大成と見なされるが、これにも同様の傾向の品詞論が述べられており、ホフマンの渡日歴がないことを考えると日本小文典の影響かと考えられる。該当箇所を英文版より訳出すると、

日本人は昔から彼らの言葉を三つの種類に分けてきた。1．The Noun 名 Na すなわちname（*nomen*）．このカテゴリーに実質名詞のほか、代名詞、形容詞、数詞、われわれのいわゆる前置詞と同じ役割を果たす後置詞として使われる関係説明詞、そしてわれわれの接続詞の一部も属している。2．The Verb, 詞 Kotoba, すなわち卓越した the word（*verbum*）、文の中の活性のある部分と考えられる。3．Particles、形式的で構成的な語であって、一般的には接尾辞suffixes（*suffixa*）であり、te, ni, wo, vaの小辞のように、われわれの語尾変化terminal inflection（*causus*）の役割を果たす。そのため、TeniwovaまたはTenivaの名称のもとに構成されている。…（中略）…さらに最近の日本の文法家によれば、小辞に対してTeniwovaの名称が維持されている一方で、体詞Tai no kotobaの名称、つまり実質語corporal or bodily wordがthe nounに対して与えられており、用詞You no kotobaの名称、つまり実効語effective wordがthe verbに対して与えられている。

江戸期以降の体・用の区別についても把握されている一方で、ラテン語による品詞名などにも言及されており、日本語の品詞に関する結論は、以下に示すようにロドリゲスとそう大きくは変わっていない。

日本人の文法家がこの三類の区別に自身を封じ込めているとしても、言葉の論理的かつ文法的な価値を定めることを可能にするためには、われわれの文法的カテゴリー、われわれの品詞の区別を、われわれは日本語に対して適合させなければならない。結果として、1．名詞、名詞のもとに含まれる2．代名詞、3．形容詞、4．数詞、5．副詞、6．動詞、7．単純にわれわれの活用語尾や前置詞や接続詞に当たる接尾語（後置詞）、8．間投詞、をわれわれは区別する。

あるいは、西洋人が彼らの言語とは大きく異なる日本語を理解するための便宜的な措置として、自分たちの品詞観を仮に用いているだけだという説明も可能かもしれない。しかし、根拠を示さず日本人の言語観を頭から否定し去る態度には、西洋人の強固な自文化中心のイデオロギーを感じとってしまうといったら言い過ぎだろうか。

三、近代化の中の新たな日本語品詞観

上述した西洋人たちの日本語品詞論が、日本人による品詞論に直接影響を与えることはなかったが、幕末から明治期の近代化の過程で、いわゆる洋学者たちの中から西洋語に範をとった言語観が現れるようになっていく。蘭学をはじめとして広く和漢梵洋の学に通じた鶴峯戊申（しげのぶ）は、オランダ語文典に範をとった日本語文法の枠組みを示した『語学究理九品九格総括図式』（文政一三年）及び『語学新書』（天保四年）を刊行した。これらは日本人による最初の西洋語文典準拠の日本語文法書として注目される。九品とは九つの品詞ということで、オランダ語の品詞設定に即して、実体言（いことば）〈名詞〉、虚体言（つきことば）〈形容詞〉、代名言（かへことば）〈代名詞〉、活用言（はたらきことば）〈動詞〉、連体言（つづきことば）〈動詞連体形など〉、形容言（さまことば）〈副詞・形容詞連体形など〉、接続言（つづけことば）〈接続詞・接続助詞〉、指示言（さしことば）〈格助詞〉、感動言（なげきことば）〈感動詞・終助詞・間投助詞〉とそれぞれ訳名を与え、日本語を説明する新たな品詞論として提案している。山田孝雄（一九四三）によれば、蘭文法の冠詞に当たる品詞が日本語にはないため、名詞に当たる品詞を実体言と虚体言に分けることで九品詞に数を合わせたとしているが、蘭文法を模倣したことにはかわりない。鶴嶺の新文法の影響力が大きなものでなかったことはいうまでもないが、西洋文典に依拠して品詞論を構築する日本語文法の在り方が後年の英学者たちによって大きな潮流となっていくことを考えると、日本語と西洋語の言語としての特性の違いに着目するよりは、当時の西洋の進んだ物質文明に追従し、そこに普遍的な価値を見出そうとする蘭学者・洋学者たちの眼差しが感じられる。『語学究理九品九格総括図式』は一葉の国文法指掌図であるが、その解説文冒頭は、「此図式ハ．雅言ハモトヨリニテ．スベテ天ノ下ニアラユル訓語韻語トモニ括尽セル図式ナリ．」と始まる。「訓語韻語」については、『語学新書』冒頭にある門人・齋藤春昌撰による「語学新書序説」の一節に、「師いはく、天下の言語かれこれ同じからざれども．言語の別は二等には過ぎざりけり．そは一つには訓語．二つには韻語なり．すべて五大洲の中に．韻語なるは．漢と孛露とのみにて．このほかは．皇国より印度諸国に至るまでみな訓語なり．」と説明されていることから、オランダ起源の品詞論が世界中のすべての言語（孛露は不明）に普遍的に適応可能と考えていたことがうかがわれる。西洋語文法、というよりも西洋そのものへの強い買い被りの態度がそこには感じられる。

明治政府の初代文部大臣となる森有禮が、明治六年にニューヨークで刊行した『日本の教育』（英文）中で提起した英語公用論もその極論であろう。日本語は漢字漢文に依存しすぎていること、欧米からの文明開化が日本中を覆い尽くそうとしていること、英語はもはや世界語であることなどの理由をあげて、All reasons suggest its disuse. と議論を結んでいる（itはもちろん日本語を指す）。また、森の日本語廃止論に反論して、同年、ロンドンで『日本語初等文法』（やはり英文）を刊行した馬場辰猪も、英語を国語とすることにいくつもの根拠をあげて反対しつつも、日本語の品詞としてはnoun, verb, adjective, …のように英語の品詞論をそっくり適応している。

幕末から明治にかけて、福沢諭吉のような蘭学青年たちはみな英学に転じていく。「主語」をはじめとする英文法からの文法的概念の直訳的移入が始まったのもこのころからである。英文法を模倣する文典は、山田（一九四三）によれば、中金正衡『大倭語学手引き』（明治四年）、黒川眞頼『皇国文典初学』（明治六年）などがあるが、「先ず重きをなしたる」ものは田中義廉『小学日本文典』（明治七年）である。田中は英文法を下敷きに品詞として、名詞（ナコトバ）、形容詞（サマコトバ）、代名詞（カハリコトバ）、動詞（ハタラキコトバ）、副詞（ソヘコトバ）、接続詞（ツギコトバ）、感詞〈感動詞〉（ナゲキコトバ）の七品詞を立てている。また、動詞の中の一種類として助動詞を立て、

> 動詞の形を変画するを、動詞の活用といふ。而して此活用は、作動の次第、法及び時限等を定むる為に、大有用のものにして、又其活用をなすには、全く動詞の形を変ずるものあり、然れども多くは此活用を示すに、他の動詞の助けを俟つ、此動詞を助動詞と名づく。

として、ル・タ・タリ・シキ・ケリ・ナリ・ヌ・ム・ン・ナラン・アランをあげている。助動詞という名称ではあるが、動詞の下位範疇として位置付けられており、動詞の活用語尾を形成するものという認識である。

同じく英文法に範をとった中根淑（きよし）『日本文典』（明治九年）は、山田（一九四三）によれば「従来比を見ざる程、組織の完備したる状を呈せるもの」であって、その品詞論は名詞・代名詞・形容詞・動詞・副詞・後詞〈格助詞〉・接続詞・感嘆詞のように、ほぼ英文法の訳語がそのまま転用されている。また、ここでも動詞の下位範疇として助動詞〈時制の助動詞〉・普通

助動詞〈終助詞〉・半助動詞〈補助動詞〉が置かれているが、いまだ助動詞は独立した品詞としての地位は与えられてはいない。

四、大槻文彦の品詞論

現代、学校文法として知られる文法が英文法を下敷きとして完成するのは、大槻文彦による我が国初めての国語辞書『言海』（明治二四年）巻頭に添えられた「語法指南」においてである。その「本書編纂の大意」（四）において、

> 辞書ハ、文法ノ規定ニ拠リテ作ラルベキモノニシテ、辞書ト文法トハ、離ルベカラザルモノナリ。而シテ、文法ヲ知ラザルモノ、辞書ヲ使用スベカラズ、辞書ヲ使用セムホドノ者ハ、文法ヲ知レル者タルベシ。…（中略）…而シテ、西洋文法ノ位立ヲ取リテ、新タニ一部ノ文典ヲ編シテ、其規定ヲ本書ニ用ヰタリ。サレバ、文法専門ノ新造語モ多ク出来レリ。此書ノ篇首ニ、語法指南トテ掲ゲタルハ、其文典中ノ規定ノ辞書ニ用アル処ヲ摘ミタルモノナレバ、此書ヲ覧ム者ハ、先ヅ之ニ就キテ、其規定ヲ知リ、而シテ後ニ、本書ヲ使用スベシ。

とあることから、文法の位立（骨格部分）は西洋文法から採用していることがわかる。後年、「語法指南」の本文を骨格に文法書『広日本文典』（明治三〇年）が、「語法指南」の注釈部分を中心に『広日本文典別記』が刊行されていく。

『広日本文典』では品詞として名詞・動詞・形容詞・助動詞・副詞・接続詞・弖爾乎波・感動詞の八品詞が立てられている。伝統的な体・用の区別をとらないことについて、『広日本文典別記』（明治三〇年）五四節において、

> 衆語ヲ、先ヅ体言、用言、助辞、ト大別スルコト、悪シトハアラネド、此ノ概別ニテ、能事了ルベキニアラズ、必ズ復タ、其ノ下ニ、小別（八品詞）ヲ立テヽ、更ニ詳説セズハアルベカラズ。然ルトキハ、先ヅ、体、用、助、ニ大別シテ説クコト、何等ノ必要モナキヤウニテ、徒ニ、一ノ煩ヲ設クルニ過ギザルベク、初ヨリ、直ニ、八品詞ヲ、各独立ニ説クコト、却テ、甚ダ簡明ナルヲ覚ユ。

と説明されている。

もう一つの大槻文法の特色は「助動詞」を品詞として立てたことにある。これについては、英文法のauxiliary verbの訳語を日本語に転用したという単純な見方はできない。『広日本文典』において「助動詞ハ、動詞ノ活用ノ、其意ヲ尽クサヾルヲ助ケムガ為ニ、其下ニ付キテ、更ニ、種々ノ意義ヲ添フル語ナリ。」と規定されている。『別記』一八七節には、

> 凡ソ、此ノ篇ニ助動詞トシタルモノ、従来ノ語学書中ニハ、スベテ、弖爾乎波ノ中ニ混ジテ説ケリ。然レドモ、是等ノ語、皆、語尾活用ヲ具シ、法ヲ具シテ、能ク文章ノ末ヲ結ベバ、弖爾乎波ニ混ズベキニアラズ。サレド、是等ノ語、独立ニテハ用ヰラレズ、他語ノ意ヲ補助スル用ノモノナレバ、固ヨリ、動詞ニハアラズ、因テ、今ハ、助動詞トシテ、一門ニ立テタリ。

続く一八八節には、

> 又云、助動詞ハ、洋文典ニテハ、多クハ、動詞ニ付説セリ、然レドモ、国語ノ助動詞ハ、活用ト法トヲ具シテ、其数モ多ク、其ノ規定モ煩雑ナルモノナレバ、一門ニ立ツベキ価値アリ、且、別門ニ立テヽ説ク方、学ブモノニモ便ナリ、因テ、今ハ、此ノ如シ。

と注解されており、英語との違いが強く意識されている。さらに一八九節では、「世ノ洋文法ニ拠リテ、国文法ヲ作ル」文法書に、「打たる」「打ちつ」「打たむ」などを西洋語流の動詞の語尾変化conjugationとして論じようとする分析に対し、「打たれしめよ」「打たれしめられたり」などの例を挙げ、これらを語尾だとすると、「MoodニVoiceヲ生ジ、VoiceニMoodヲ起シ、TenseニMoodアリ、MoodニMoodヲ重ヌルニ至ル、豈ニ解スベカラザル極ナラズヤ。」とし、重ねて用いることが可能であることを理由に動詞の語尾には当たらないと断じている。助動詞という名称上は英語から採用したように見えながら、むしろ英語と日本語との間の文法的葛藤を経て品詞立てされたことがわかる。

> 各国天然ノ言語ニ、差違アルベキハ、理ノ然ルベキ所ニシテ、其間ニ、惑ヒヲ入ルベキニアラズ、唯、其国語ノ天性ニ随ヒテ、語法ヲ制定スベキナリ、彼ニアレバトテ、我ニ模擬揑造シ、彼ニ無ケレバトテ、我ニ制定セザルハ、其見、

亦、陋ナラズヤ。

大槻の品詞論において、基本的な姿勢は西洋文法に基づくものでありながら、助動詞を品詞立てした点においては、英語ではなく日本語の側に根拠が求められており、大槻文法が折衷文法と言われる所以である。助動詞については、その後、山田孝雄や時枝誠記による異説も登場するが、日本語文法の近代化という点では、大槻文法をもって一つの完成と見ることができる。

日本にとっての近代化が西洋諸国と同様の社会インフラ・文化インフラを持つことであったとするなら、大槻文彦は、国語の近代化の一環として、西洋文法の影響のもとに国文法の確立を成し遂げたというべきだろう。これを単に西洋文法の買い被りとか拡張適応ということはできないことは、言語類型の違いにもとづく助動詞の品詞立てによく現れている。また、活用の説明については江戸期の国学者流を継承しており、むしろ国学系の要素と洋学系の要素が巧みに折衷されていると評価されてきた。

現在、世界中で起こっているグローバル化と関係づけて論じてみれば、拡張する側が単一であっても、拡張される側は多様であって、その間に様々なグローバル化の過程が考えられることになる。Couplandによれば、グローバル化を論じる際には、同一性と異質性、求心的傾向と遠心的傾向、一致と分裂の間に生じる緊張tensionsを探求していく必要があるという。グローバル化とは順調に進まないnon-linearなものであり、一様にも（そして皮肉なことだが）普遍的にもグローバルにも経験されるようなものではない。相互の関係性の中で、均一性と同様に差異をも生成するようなプロセスの複合としてグローバル化はより良く理論化され、そこには混成性hybridityや多様性multiplicityが生み出されることもしばしばである（Coupland 2013: 5）。そのような意味において、大槻文法を折衷compromisedと表現するより混成文法hybridized grammarととらえた方が適切かもしれない。

五、明治期の西洋人の日本語品詞論

明治期の近代化の過程にあたる時期に日本に滞在した欧米人たちは、どのように日本語を観察したか、彼らの書いた日本語文典の品詞論を簡単にたどってみよう。明治初期に西洋人によって書かれ西洋人に最も広く読まれた口語日本語文典に、W. G. アストンの *A Short Grammar of the Japanese Spoken*

Language.（初版一八六九年〜三版一八七三年）があるが、そこでは日本語の品詞に関する説明は一切なく、英語の品詞が当然のごとく使われている。しかし、その後、明治六年に来日し三十年以上にわたって日本語・日本文化を探求していったB. H. チェンバレンの日本語研究の中では、むしろ西洋語文法との異質性に注目していくようになる。チェンバレンは、"Past Participle or Gerund? -A Point of Grammatical Terminology-"（『日本アジア協会会報』一四・明治一八年）などで西洋人が西洋語の文法カテゴリーを日本語文法の説明の中で乱用することを批判しており、そこにはロドリゲスやホフマンについても批判的に言及されている。チェンバレンの日本語研究の全体像については大野（二〇一八）に譲り、ここでは品詞論について概括してみよう。

チェンバレンは、以下の三種の日本語文典を残している。

A Simplified Grammar of the Japanese Language (Modern Written Style).（『簡約日本語文典（現代書き言葉文体）』）一八八六年

『日本小文典』（和文）明治二〇年（一八八七年）

A Handbook of Colloquial Japanese.（『日本口語文典』）一八八八年

三文典を通じて西洋語文法の品詞観は直接反映されてはいない。そこには、むしろ江戸期の国学者流の「働く（活用する）」か「働かない（活用しない）」かで語全体を二分する基準が想定されており、日本人の素朴な言語観が尊重され、膠着語といわれる類型の言語の特性がよく見抜かれている。

『簡約日本語文典』は、副題に*Modern Written Style*とあるが、古文のことではない。当時はまだ言文一致が社会全体はおろか文学運動としても黎明期に過ぎなかったこともあり、外国人の目には話し言葉と書き言葉の二種の日本語が存在することが序文に指摘されており、当時の書き言葉文体を習得することが目的であって、純粋の古文を読むための文典ではないことが明記されている。品詞論の説明として、

> 日本語を構成する語は、屈折しない（語形変化しない）語類the uninflectedと、屈折する（語形変化する）語類the inflectedという二つの大きなグループに分かれる。屈折しない語類は、Ⅰ. 実名詞に加えて代名詞を含む名詞、数詞、そして多くの英語の形容詞に相当する語、Ⅱ. 英語の前置詞の多くに相当する後置詞、である。屈折する語類は、Ⅰ. 形容詞、Ⅱ. 分詞を含む動詞、である。この区分は便宜の

ためにつくられた人為的なものではなく、日本語の性質と歴史の中にその基礎が置かれている。

のように、体言と用言に相当する基準が最優先されている。

『日本小文典』は、文部省の依頼により和文で執筆されたものであり、学校教育で使用することを前提に文部省編輯局より刊行されている。これには連綿体の筆書きで自序が冒頭に添えられているが、そこには次の一節も含まれている。

おのれは外つ国人にして皇国学のみちにはただたどしければ　爰に書きつらねたらむことどもは皇国人の心にはあかぬことのみなんおほかるべき　まして皇国のふみののりを外つ国のふりして撰みつれば耳あたらしくききなさるるままに　とみにはさとりがたかめるふしぶしもおほかるべしまた縣居の翁鈴の屋の大人などの書をばふつにひきいでずはた大人たちの説といたく異にしあれば　見むひとあたら皇国の博士たちのいたつきをばうちすてたりとやおもふらむ　されどすべてのことはその世のふりのまにまにものするこそことわりなれば　今明治のみさかりにひらけゆく大御代に　言葉のすぢを教ふるひとふしのみむかしのままになづみものすべきことにやはある

『日本小文典』が西洋語文法に準拠する新しい一面を持ったものであり、伝統的な本居宣長や賀茂真淵の考え方にあえて言及しなかったことを釈明しているが、この一節はこれらの国学者たちの国語学への貢献についてチェンバレンが承知していたことの証左と読むこともできよう。『日本小文典』の品詞の説明は、

日本語には、働き辞と働かざる辞との二種あり、働き辞は、形容詞、動詞の二種に分ち、働かざる辞は、実名詞、代名詞、副詞、接続詞、数詞、間投詞、関係詞の七種に分つ、それ故に、我が国にては、辞に九品の詞ありといふ、

とあり、「九品」という品詞立てはヨーロッパ語と同じであるが、全体が体・用で分たれており、それを「我が国にては」と表現するチェンバレンのスタンスは明らかに日本語側である。

『小文典』が当時の国学者たちに大きな刺激を与えたことは、同年ただちに国学者、谷千生により『ビー、エッチ、チャンブレン氏 日本文典批評』が刊行されていることからも知られる。チェンバレンの真意はむしろ体・用の二分論の優先にあったわ

けだが、谷は同書の中で、「何事もその術語とする名目無くては叶はず。然れども其名目はなるべく少なく設けて多岐にわたらざるようにするは緊要なり」として、九品詞論は煩雑なりとし、体言、用言、用言のもとに作用言と形状言、そして「てにをは」があれば十分であり、さらに「助言にして活用する名目が足らざるなり」として、大槻によって助動詞として立てられることになる品詞が欠けていることを指摘している。

『日本口語文典』は、『簡約日本語文典』が文法説明に終始したのと異なり、全体が理論篇Theoretical Part or Grammarと実用篇Practical Part or Readerに大きく分かたれており、どちらかといえばチェンバレンは実用篇に重きを置いている。しかしながら、理論篇における文法説明は、それまでの西洋人の文典中で最も詳細であり、当時、隆盛を迎えつつあったヨーロッパの言語学の水準をよく反映したものであった。理論篇は西洋語の品詞別に章立てされて日本語文法の各論が説かれているが、総論としての日本語の品詞論として、

> 日本語の品詞について、厳密にいえば、動詞と名詞の二つしかない。西洋語の前置詞、接続詞、活用語尾に当たる、（日本語の）小辞particleあるいは後置詞、そして接尾語suffixesは、それ自体もともとは名詞や動詞だったものの残存物である。代名詞や数詞は単に名詞である。真の形容詞は、副詞を含めて中性動詞neuter verbの一種である。しかし、西洋語の形容詞と副詞に対応する多くの語は日本語では名詞である。我々（西洋人）の文法範疇は日本語には全く適当ではなく、馴染みのある道しるべとして機能する限りにおいて、それらを本書の中で用いているだけである。

と説明されている。「動詞と名詞の二つしかない」とは用言と体言の二大別のことであり、テニヲハはそのどちらかの残存物という見解である。アストンの最後の日本語文典となる*A Grammar of the Japanese Spoken Language.*（一八八八年）において、チェンバレンが指摘したような日本語と西洋語の品詞概念の違いについて言及したPARTS OF SPEECHの一節が加えられたことは、日本語が西洋語と根本的に異質であることが西洋人の間で広く理解されるようになったことを示すものである。

チェンバレンをはじめとする明治期の西洋人たちは、自分たちの言語観を日本語の上に必ずしも売り被せてはいない。大槻文彦と同じ時代にあって、むしろ西洋語との異質性を日本語文

法の中に見出そうとしていた。大槻文法とは異なるベクトルにおいて、チェンバレンもまた混成文法hybridized grammarを目指していたと言うことができるだろう。

　今後、様々な分野で進展していくであろうグローバル化においても、一次元的に拡張が行われるのではなく、均質化が可能な普遍的部分と差異化されなければならない固有部分とを明確にしつつ、事態が進展することだろうし、そのようにあることを期待する。普遍をかたりながら個別の枠組みを一方的に拡張することはあってはならない。

参考文献

大野眞男（二〇一八）「バジル・ホール・チェンバレン—日本語研究に焦点を当てて」『アジア遊学二一九・外国人の発見した日本』勉誠出版

三上章（一九五三）『現代語法序説：シンタックスの試み』刀江書院

山田孝雄（一九四三）『国語学史』寶文館

Coupland, N. (2013). Introduction: Sociolinguistics in the Global Era. IN N. Coupland (ed), *The Handbook of Language and Globalization*, 1-27. Malden, MA: Blackwell.